

「ミスいっぱい」が力をつける

「新・スペースわん通信」第1号に、大阪府立住吉高等学校の国際文化科に合格したYさんにインタビューしてまとめた文章を載せました。今回は、小2の冬から「スペースわん」で学んできたYさんの受験までの歩みを、インタビューで話してくれたことも交えながら書いてみたいと思います。

なんかわからんけどやり始めて

Yさんとの出会いは、お母さんが、「らくだ」のプリントを開発した平井雷太さんの講演会に来られたことがきっかけでした。1997年1月のことです。

その年の11月末、小2のYさんはお母さんと一緒に「スペースわん」に来て、お試しのプリントをやりました。最初にやった小1-3という「+1」ばかり84問あるプリント（目安3分）が、6分22秒、というところからのスタートでした。彼女の場合、横式の足し算・引き算、足し算の筆算までは、ミスは多くても4個でした。時間については、同じプリントを3回4回と繰り返せば縮まることが、少しやってみればすぐにわかります。でも、いつまでもその状態というわけにはいきません。

この頃のことを振り返ってYさんは次のように言っています。

プリントは、なんかわからんけどやり始めました。最初は簡単で楽しかった。ミス0だとうれしいし。

小2のプリントで、引き算の筆算でミス30個ぐらい出て、なかなか合格できなかつたことがあります。でも、何回もやったら、合格できた。気持ちとしては早く合格して次に進みたい。でも、取りあえずそのプリントに合格せな次には進まれへんので、繰り返しやったら合

格しました。

第一の「カベ」を乗り越えて

当時の記録表を見てみると、Yさんの言う「ミス30個ぐらい」出たプリントは、小2-23という2ケタ-1ケタの引き算の筆算のプリントで、実際はミス15個でした。彼女にとって、「30個ぐらい」と感じるほど、ミスがたくさん出たことがショックだったに違いありません。でも、間違いのパターンが決まっていたので、間違い直しをしてからもう一度そのプリントをやると、ミス1個に減っています。

これがYさんにとって第一の「カベ」でした。この時のことを、約1年後お母さんは次のように言っておられます。

クリアしないプリントに初めてぶつかった時、急にいらいらしだし、「先生におこられる」と言って泣き叫んだわが子を、不思議なことに私は余裕をもって見ていました。

彼女がそれでも「らくだ」のプリントをやめなかったのは、「自分で決められるから」ということでした。自分に無理をしないでいい、易しいところに戻ろうと思えばいつでも戻れるということのようです。

その後の彼女の変化もさることながら、おもしろいのは、私自身の彼女を見る目が変化してきていたことです。彼女がある時、ミス20の自分のプリントを見てニコッと笑ったその瞬間、「ああ、よかったです」と心底思いました。

かぼそい神経をもち、自分のミスを許せなかつた子が、自分自身の力で乗り越えなければならないプリントをやり続けるなかで、無理なく自然にゆっくりと、強くなっていくのを感じています。

第二第三の「カベ」も越え…

「スペースわん」では、ミスがたくさん出たり時間がすごくかかったりしたことに対して私が怒るということはありません。逆に、「力がつくプリントに出会ってよかったです！」と言うわけですが、入会したばかりの生徒さんにとって、このことがすっと理解できるとは限りません。というよりも、ほとんどの子がやはりYさんのように「先生におこられる」とか「恥ずかしい」と思い、泣いたり落ち込んだりします。

でも、間違い直しをしたらミスがびっくりするほど減ったとか、同じプリントを繰り返しやったらびっくりするほど時間が縮まったとか、そういう体験を何度もするうちに、ミスがたくさん出たり時間がかかったりすることに対する抵抗感がなくなってくるようです。

Yさんは、そのうちにまだ学校で習っていないところをやるようになりました。当然、最初からスラスラできるはずがありません。

まだ習っていないかけ算の筆算の最初のプリント（小3-3）をやった時は、ミス37個、2ケタ×2ケタのかけ算筆算の最初のプリント（小3-10）ではミス22個、というふうに、ミスが10個以上になることもあります。同時に、時間もかかるようになり、繰り返す回数も多くなりました。

でも、「第一のカベ」にきちんと向き合って越えてきたYさんにとって、その「第二第三のカベ」も、その後何度もやってくる「カベ」も、「自分は越えられる」「やつたらできる」と信じられたのではないかと思います。

「プリントイヤやったわ」、でも、「わからんことやるの楽しかった」

Yさんは、次のような話もしてくれました。

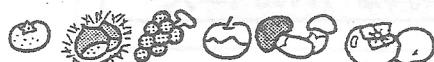
小4あたりから、プリントを毎日やらないと気がすまないようになってきました。やれたら記録表に色を塗るようにし、1日やらなかったらその欄があくのがイヤだったのです。やつたようにウソをつくのもイヤでした。

今から考えると、中3までプリントをやつたことは大きかったです。特に算数で学年より先に進んでやつたことで、「わからんことをやるのは楽しい」と思いました。算数・数学の計算ができたから、理科の計算は苦にならないということも感じました。

でも、ずっと楽しくやっていたわけではなかったようで、「プリント、イヤやつたわ」とも言っていました。「イヤだからやらない」ではなく、「イヤだけどやる」というのを、無理なくやれるようになったのでしょうか。また、「イヤだけどやつてみたら案外楽しかった」という体験も積み重なったのかもしれません。

先月号に書いたように、彼女が受験の時、「一見マイナスのことをバネにして『サバイバル』」できたのも、そういう体験の積み重ねが関係しているように思えるのです。

ギリギリまであきらめずに自分の力を信じてがんばったYさんの「底力」は、「ミスいっぱい」のプリントにぶつかっては、繰り返しやってその「カベ」を越えてきた体験から培われたのかもしれません。きっと、「ミスいっぱい」のプリントは「宝物」なのです。



わん!

今月の一言～♪「今日は『わん』の日」♪～

一日にやるプリントの枚数を決め、他のことよりも先にプリントをするようにしたら、生活が変わりました。

先にやるとすっきりして達成感があり、家事などの他のこともスムーズにできるようになりました。

家事について、「らくだ」の記録表のように、ノートに項目を書いて、やれなかったら×をつけてみたら、自分の調子がわかり、洗い物が毎日できるようになりました。また、記録表ではやれなかったら「×」ではなく「○」をついている意味もわかりました。

生徒さんの生の声を紹介するコーナーです。今回は、小5から不登校で、高認試験（以前の大検）を受ける予定のAさん（21歳）の言葉です。Aさんとお友だちとの間では、「スペースわん」に来る日のことは、「今日は『わん』の日やねん」で通じるそうです。

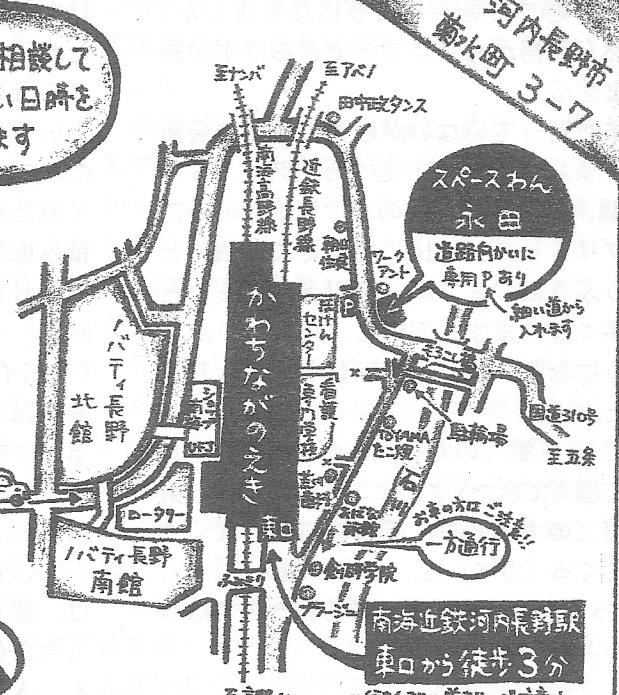
プリントを、自分でやると、人と約束してやるとでは全然違いますね。

プリントについての約束を紙に書いてもらい、その紙を見ることで先にやれるようになりました。

バイトしてわかったことですが、

「失敗してもOK」が「わん」（「スペースわん」のこと）で身についたように思います。前は、「失敗せんようにしてよう、でも失敗して何か言われたらどうしよう」と焦ったりしていましたが、今は、「失敗したり間違ったりしたら、言ってくれる、言われたら、そこを変えたらええやん」と、失敗することが恐くなくなりました。

らくだ教材で学ぶ塾 スペースわん / 幼児から大人まで 年齢不問

学習日	月・火・木（祝日休） PM 2:00 - 9:00 週1~3回（原則は週1回）	指導者と相談して 都合のよい日時を 決めます
科目	算数・数学・国語・英語 (原則として最初は算数から)	かわちながのえき 南海近鉄河内長野駅 東口から徒歩3分 ※行き止りの道あり。ご注意！
入会金	1家族 ¥15,000- (税込) 「セルフランニング どり子にも学力がつく」 (平井雷太著)を入会時に進呈	
月会費	週何回来ても 何科自学んでも ¥10,000- (税込) 〔スペースわん通信 講読料含〕	
通信指導あり 随时入会可 見学・体験学習可		事前に お問い合わせ 下さい

TEL&FAX 0721-54-3301 指導者 永田仁美